**第1回観世会能楽講座（2017.2．15　梅若能楽院会館　18：30から）記録**

**「春日龍神」**

**あいさつ（観世宗家：観世清和）**

　観世会館は、今春4月20日に銀座へ移転するが、実は235年間（徳川三代家光のころから）住居はいまの銀座にあった。149年ぶりに還る。現在のガス灯通りはかつては「観世通り」であった。銀座にはルールがあり、すぐには名前を変えられないが、行く行くは「観世通り」にもどしたい。2020年までには電光板もつける予定である。皆さまに愛される能楽堂にしたい。

**進行役（松岡心平：東京大学教授）**

**ゲスト（鎌田東二：京都大学名誉教授・上智大学特任教授）**

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

**法螺貝奏上（鎌田）**

　法螺貝は法華経の中で法螺を吹くと語られ、仏教の世界を伝えるが、縄文人は法螺貝を吹いていたと思われる。（法螺貝の縄文土器が出土している。）そこに仏教が入って来て法具となるが、山岳修行など様々に使われている。（儀式・位置・熊除けなど）能楽にも山伏は良く出てくる。

**進行役（松岡）**

本日のテーマ、春日信仰中心ではあるが古層の音の記憶であり、仏教は新しい。

「春日龍神」ではお釈迦様の世界が展開し、仏と神が重なり合う。法螺貝はそこを繋ぐものである。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

**能楽「春日龍神」のあらすじ**

　天竺（インド）に行きたいと願う明恵は、春日明神のところ参拝に行く、そこで春日龍神にお釈迦様の一生をパノラマのように見せられ、春日山にこそお釈迦様の信仰があるとし、天竺行を断念する。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

以下は、http://www.syuneikai.net/kasugaryujin.htm名古屋春栄会（仕舞・謡会）の演目紹介を参照（木村）

春日竜神（かすがりゅうじん）

【分類】五番目物　（切能）

【作者】不詳

【主人公】前シテ：宮守の翁、後シテ：竜神

【あらすじ】（舞囃子の部分は下線部です。仕舞の部分は斜体です。）

山城国（京都府）、栂尾の明恵上人が中国、インドの地に渡ろうと思い、その暇乞いに春日明神に参詣すべく奈良にやって来ます。春日の里につくと、宮守の老人が現れて、明恵上人が唐、天竺へおもむくと聞いて驚きます。そして、かねてから春日明神は、明恵上人を太郎、笠置の解脱上人を次郎と呼んで、両手両足のように思し召して特別に守護しておられるのに、いま上人が日本を去っては、神慮に背くものであるといいます。上人は、霊地、仏跡を巡拝するためだから、神もおとがめにならないだろうと答えます。しかし、宮守は、釈迦が在世中の時ならば利益もあるが、入滅後の今日では、この春日山が釈迦が説法をされた霊鷲山であり、春日野が釈迦が悟りを開いた鹿野苑、比叡山は天台山、吉野、筑波は五台山を移したものであるからと、入唐渡天が無用であることを説き諭します。さすがに明恵上人も、これをご神託と思い、宮守の名を問います。老人は春日明神の使者、時風秀行と名乗り、上人が入唐渡天を思い止まるならば、誕生から入滅までの釈迦の一代記を見せようと言って消え失せてしまいます。

≪中入≫

やがて、春日野は、一面に金色の世界となって、八大竜王が百千の眷属をひきつれて現れ、他の仏達も会座に参会し、御法を聴聞するさまを見せます。上人がこの奇跡を見て、入唐渡天を思い止まると、竜神は姿を大蛇に変えて、猿沢の池の波をけたてて消え失せます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋です。仕舞の部分は下線部です。）

時に大地震動するは。いかさま下界の竜神の出現かやと。人民一同に。雷同せり。時に大地震動するは。下界の竜神の参会か。すは、八大竜王よ。難陀竜王。跋難陀竜王。娑伽羅竜王。和修吉竜王。徳叉迦竜王。阿那婆達多竜王。百千眷属引き連れ引き連れ。平地に波瀾を立てて。仏の会座に出来して。み法を聴聞する。そのほか妙法緊那羅王。また持法緊那羅王。楽乾闥婆王。楽音乾闥婆王。婆稚阿修羅王。羅ゴ阿修羅王の。恒沙の眷属引き連れ引き連れ。これも同じく座列せり。竜女が立ち舞う波瀾の袖。竜女が立ち舞う波瀾の袖。白妙なれや和田の原の。波浪は白玉。立つはみどりの、空色も映る海原や。沖行くばかりに月のみ舟の。佐保の川面に。浮かみ出ずれば八大竜王。

＜働キ＞

八大竜王は八つの冠を傾け。所は春日野の月の三笠の雲にのぼり。地に降りて、飛火の野守も出でて見よや。麻耶の誕生、鷲峰の説法、双林の入滅。ことごとく終りてこれまでなりや明恵上人、さて入唐は。留るべし。渡天はいかに。渡るまじ。さて仏跡は。尋ぬまじや。尋ねても尋ねてもこの上嵐の雲に乗りて。竜女は南方に飛び去り行けば。竜神は猿沢の池の青波蹴立て蹴立てて。その丈千尋の大蛇となって。天に群り地にわだかまりて、池水を返して。失せにけり。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

**日本の神社信仰はわからないことが多い。**

　起源・由緒など、わからない。しかし、７Ｃ後期、８Ｃには記録がある。どこまで遡ってもつれ合って、降り合わさったのか、わからない、ところがある。

（伊勢・出雲・阿蘇：いくつかの記録が残されている）

**春日大社の不思議**

「白磐座」2015年5月に初めて一般公開に踏み切った。その驚き。謎。（新聞資料参照）

710年に平城京ができたころ、春日の山から社をおろしてきた。東大寺大仏殿建立の頃には4殿できていた。

爛熟期の奈良の中心に。春日曼荼羅は５神で白鹿で描かれている。

第1殿：鹿島からタケミカヅチ神

第2殿：香取からフツヌシの神

第3殿：アメノコヤネノミコト

第4殿　姫神

第5殿：若宮

**なぜ「鹿」が出てくるのか**

東北（鹿島・香取）の狩猟文化の神々→西国の農耕文化（藤原氏）

**動物的な部分・・・縄文・狩猟文化のなごり**

　春日信仰の面白いところ：表面は神社信仰・動物の犠牲によって成り立つもの

　若宮おん祭り：大宿所ではタイ・キジ・タヌキ・ウサギなどが多量につるされて描かれている。

　諏訪大社：イノシシの首

　宮崎○○神社：イノシシ

**古層の神々**

龍・鹿・・・ケンゾク、役行者は前鬼・後鬼を従えている・・・古い神々である

春日龍神は春日明神4座にお仕えする。

大神神社（三輪）：へび

伊吹山：白イノシシ（古事記）・大蛇（日本書紀）

**中臣氏の祖先**

時風（ときふう）・秀行（ひでつらorひでゆき）・・・祭祀者、鹿と一緒にやってきた

鹿をコントロールできるノーハウを持つ人・・・狩猟的なアニマル○○○○も。

春日若宮がへびで現れたという伝説（春日社内資料）1000年前後

アメノオシクモネノミコト

**祇園**

水谷神社・京都八坂神社・・・・白漆喰磐座の謎

水に関わる。八坂神社の下は池。プールのようになっている。

粟田神社・・・○○○○

卜部カネトモ→吉田

藤原―九条兼実の弟（慈円：愚管抄の作者）

京都（祇園祭）　　　　　春日（おん祭）

　八坂神社・・・・・・・・水谷神社――社殿下に白漆喰磐座と同様のものがある・・・・何のため？

|  |
| --- |
| 水谷神楽　　　　　南都禰宜衆－歌舞伎狂言　　　　　　　　　　　　　　　　　　水谷狂言 |

　　　　　　牛頭天王

　　　　　荒魂

　　　　その前に芸能――――荒神的神

**白漆喰磐座**

　封印・顕彰・コントロールの意味合い（鎮める・押さえ込む）象徴性

　相当こわい、恐ろしい神・・・・ちはやぶる神――若宮出現（蛇・龍神）――ちはやぶる神の復活

**龍神**

　仏教の世界観を知らなければわからない

**明恵上人（太郎）**

　紀州○○出身

　お釈迦様慕って天竺に行きたい

　春日を愛している

　高山寺を立てる前のような気がする

従僧（次郎）

春日の社人（宮○○）が行ってはいけない

　三笠山が実はお釈迦様（霊鷲山）であり、もうお釈迦様（＝春日明神）はいる

**明恵は瞑想の達人**

　樹上瞑想・右の耳を切り瞑想・・・・奇人・変人的

　あかあかや　あかあかあかやあかあかや　あかあかあかやあかあかや月

（意味不明であるがビンビンと情景が浮かぶ）

**阿弥陀・浄土信仰**

　明恵（1173）は親鸞と同じ年、12歳で壇ノ浦（源平の合戦）8歳で両親を亡くしている

　慈円の下で出家・・・同時代人

**夢記**

　鏡・たま→　御仏になる（象徴的解釈）

　三神託宣（伊勢・春日・八幡）

　夢は決定的に重要・・・・自分の霊性の方向・・・明恵も親鸞もよく見ていた

　闇の中で光を求めた

**釈迦信仰・弥陀信仰**

　後ろ戸で上流の夫人と交わった夢（河合隼雄：コウゾウ菩薩と一致する）

**新仏教と旧仏教**

　新）阿弥陀信仰：法然・親鸞・一遍―――阿弥陀念仏（院政期後半）

　旧）釈迦信仰への回帰：天台・法相・インモンの堕落　→自浄作用→釈迦信仰：インドに行きたい明恵

　　　興福寺と一体化している春日明神（春日社）――　対立　――阿弥陀信仰

**お釈迦様の一生を見せて明恵を留める**

　明恵の夢記は19歳から40歳くらい書き続けた。・・・瞑想のひとつの方法

　華厳経的　東大寺のルビシャナ仏

　密教的なものでは地獄のような現実を生きて行けない

アミダ原理主義×シャカ原理主義

タチバナ氏の娘によって思いとどまるように（？）

31歳ころに思いとどまる（1200年ごろ

実朝も天竺に行きたがっていた。

海外・新天地への希望、もっと情的な世界に行きたい、原点回帰）

**3回の誓い**

最後は否定形3回のくりかえし、中国にも天竺にも行かない。3度も誓う。

**貞慶の役割**

　春日御本地釈（？）宮の本地仏

　藤原兼実「フクウケンジュ観音」

　重慶「釈迦如来」とした。・・・南都律宗の人たち　西大寺・唐招提寺

　春日大明神はお釈迦様の○○

**1465年くらいの能である**

　世阿弥以降、

音阿弥一座が初演（？）

15世紀には春日山がお釈迦様の聖地であると一般に受け入れられる。

「采女」の世界も春日の原生林をお釈迦様の聖地としている・・・エコロジカルな運動

**貞慶**―道行　13世紀はじめ　唐招提寺→清凉寺（釈迦如来寺）→　大念仏「百万」

南無釈迦（釈迦念仏）＋南無阿弥陀仏（阿弥陀信仰）の融合

**1190年ころ・・・新たな春日曼荼羅**

第一殿の　タケミカヅチノカミ　　釈迦の浄土（霊鷲山）

第三殿の　アメノコヤネノミコト　地獄（地蔵菩薩）谷間のあたり

龍神・・お釈迦様が統治していると集まってくる

龍神・竜女・・・法華経で語られている

　　　　　　　　ナルイカワチ神社（竜女信仰）

前シテの最後：うせにけり　うせにけり

後シテの最後：うせにけり　うせにけり

春日世界―お釈迦様の世界

　「お釈迦様の一代記をお見せしますよ」４つの聖地をパノラマのように見せる

八大龍を全部出す

竜女の舞

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

この後、演舞に入る

坂口・宗家

実演後

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

宝生流が演出した**「龍神そろえ」**1760年ころ

**徳川光圀はお能が大好き**

　小姓　藤井門太夫を鏡の間で刺殺した柳沢吉保（お能が大好き）堂々と後を務めた

**美しい世界―荒ぶる世界の両面**

　後半：金色仏体、ご神体→仏の信仰

　さまざまな竜王が呼び出される

**作者不詳**

　禅竹ぽい・・・教養の深さ

止める春日龍神に対して春日明神は母親的

ドラマティックな展開

**三社神託**

稲荷明神　託宣　10番（伊勢３　春日３　石清水３　「わたし」稲荷1番）それぞれ奉納

**春日おん祭りには世阿弥も参加**

多武峰にも

**高山寺の「樹上瞑想図」**

明恵の弟子が描いた

日本において昇華・・・曼荼羅を意識した大和心

墨染衣で若々しい・・・アッシジの聖フランチェスコのよう（？）

草木国土悉皆成仏

**能演技者から見た明恵・・・謡曲の中の登場人物となってしまう**

　後で歴史を習ってわかること

　明恵の直筆の書：紙は中国からの輸入　天平前後

　中世：鑑真をしのびながらもう一回リバイバルを願う

**明恵は親鸞さんと同じ年・・・なぜ天竺に行きたいのか**

**（実朝も）**

光明を見い出したい現実

探求したい心

今にも通じる

**13世紀・・・日本のこころが日本のこころとなった（鈴木大拙）**

人間的にピュア―ですごい人がでたころ

**「新古今和歌集」**でも19巻・20巻に「神祇歌」「釈教歌」をおいて時代の救いを求めている

西行・慈円・式子内親王

石笛奏上（ここであったと思う）

（観世宗家）

次回は５月18日銀座シックスで

　舞台は1年2か月長野県佐久市で和紙に包んで保存

4月20日にオープン

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

以下ネットで検索した資料（木村）

本地垂迹資料便覧から

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 一殿 | 不空羂索観音 | 釈迦如来 |
| 二殿 | 薬師如来 | 弥勒菩薩 |
| 三殿 | 地蔵菩薩 |
| 四殿 | 十一面観音 | 救世観音 | 大日如来 |
| 若宮 | 文殊菩薩 | 十一面観音 | 聖観音 |

<http://www.lares.dti.ne.jp/hisadome/honji/files/KASUGA.html>

高山寺ＨＰから

明恵は承安三年（1173）に生まれ、寛喜四年（1232）に没した。八歳で父母を失い、高雄山神護寺の文覚について出家する。東大寺で華厳を学び、勧修寺の興然から密教の伝授を受けた。建永元年（一二〇六）後鳥羽院より栂尾の地を賜り、高山寺を開く。http://www.kosanji.com/myoeshonin.html

明恵の教学は華厳を基礎とするが、華厳と真言密教を融合した厳密（ごんみつ）と呼ばれる独自の宗教観を打ち立てた。実践的な修行を重んじ、中でも仏光観と光明真言とが重視される。明恵の宗教思想を理解するため、入寂時を見てみよう。場所は禅堂院、その持仏堂には五秘密曼荼羅（ごひみつまんだら）、華厳善財善知識図（けごんぜんざいぜんちしきず）、華厳海会諸聖衆図（けごんかいえしょしょうじゅうず）が飾られていた。臨終のしつらえとして明恵は弥勒菩薩像を置き、五聖（ごしょう）曼荼羅図をかけ、光明真言、文殊五字真言を唱える。華厳善財善知識図、華厳海会諸聖衆図、五聖曼荼羅図は華厳・仏光観に関わり、五秘密曼荼羅、光明真言、五字真言は密教に関わる。臨終の場はまさに厳密を具現化したものであった。明恵はまた、釈迦、仏眼仏母（ぶつげんぶつも）をはじめ、文殊、弥勒、春日明神などに深い信仰を寄せている。高山寺の宝物が多岐にわたることは、明恵の信仰の多様性に起因するといえよう。<http://www.kosanji.com/myoeshonin.html>